

RUBeC 演習で少しだけ 変わったこと

樋口 勇人

Yuto HIGUCHI

機械システム工学専攻修士課程 1年

1. はじめに

私は2016年8月13日～29日の約2週間、カリフォルニア州バークレー市の Jodo Shinshu Center 中にある Ryukoku University Berkeley Center にて、「RUBeC 演習」に参加しました。この演習では主に、英語のテクニカルライティングとプレゼンテーションの学習を行い、加えて現地の企業や大学の訪問も行いました。また、滞在中にはホームステイをしました。

2. プログラムに参加した目的

私が海外を意識し始めたきっかけは、姉です。姉は半年ほどアメリカに留学し、帰ってきたときの彼女はまるで別人のようでした。英語力の上達だけでなく、それまで口数の少なかったのが嘘のように喋ることがすごく楽しそうでした。姉をそこまで変えたのは何なのかを自身が海外体験することで見つけ、同じように今の自分を変えたいと思い、このプログラムに参加しました。

3. 講義内容

水曜日を除く平日は、午前中にはテクニカルライティング、午後にはプレゼンテーションの講義があり、それぞれの講義のはじめに規則や成績評価について説明があり、「講義中は必ず英語で話すこと」や、「間違えても積極的に手を挙げて授業に参加する者を高く評価すること」などが伝えられました。

3.1 テクニカルライティング

この講義は、事前に提出した自身の研究の要旨の英訳を校正することが目的です。はじめに講義中や

宿題で分からないところを質問するためのフレーズから教わりました。講義中に先生の方から「Do you understand?」や「Any questions?」と何度も理解度を確認されるので、そのときに「I'm alright!」など必ず何らかのアクションをとらなければなりません。一見簡単そうに思えますが、受動的な講義体系に慣れてしまっている私にとっては鬼門でした。そして、本格的に文章校正の講義に入ると、冠詞「a」、「an」、「the」の使い分けや前置詞、接続詞を中心に教わりました。冠詞はまず分類されるもの(classified)と特定されるもの(identified)に分けて考え、分類されるものは単数形であれば「a(an)」、特定されるものは「the」とします。自分の要旨はこれらが混同していて、また付け忘れも多くあったので、この機会できちんと学べて良かったと思います。要旨の校正が終わると、3分間で7回、要旨の内容についての説明を行いました。はじめは言葉に詰まることもありましたが、最後には3分間続けて話せるようになりました。

3.2 プレゼンテーション

この講義は、自分の研究について英語でプレゼンテーションをすることが目標です。重要なポイントは、ジェスチャー、ボリューム、アイコンタクト、エネルギーの4点で、これらが欠けていると聞いている人に話が伝わりません。はじめ私は、アイコンタクトやジェスチャーがほとんど出来ておらず、厳しい評価を受けました。講義が進んでも中々改善できず、2週目のはじめの1分間スピーチではとうとう頭が真っ白になり、半分近く黙ってしまいました。そのとき先生に、「実際に人に向かって話すことをイメージして、鏡に向かって声を出して練習なさい」と練習方法について指摘されました。私はその日のことが相当悔しくて、最終プレゼンテーションでは絶対に改善してやるという気持ちでした。さて、プレゼンテーションの作成方法についての講義ですが、ここでは先生がはじめに「Yahoo」と「Google」のホームページを例に挙げ、それぞれの

サイトの特徴を説明し、1つのスライドに多くの情報を詰め込みすぎないようにすることや、アニメーションを使って1つ1つの情報を順序立てて表示し説明することで、1つのスライドにストーリーをつくることを心掛けるよう指導され、最後にはこれらの要点を抑えたプレゼンテーションが完成しました。最終プレゼンテーションでは、毎晩練習した成果もあってこれまでで最も良い発表ができ、先生には「人が変わったようだ」と褒めていただきました。

4. 企業訪問と大学訪問

1週目の水曜日は、Thermal Technology社を訪問させていただきました。この企業は高温炉のシステム設計や製造を行うメーカーで、特に放電プラズマ焼結（SPS）という技術に注目しているそうです。この技術を使えば、短時間での熱処理が可能となり、さらに機械のランニングコストを下げ、材料の特性を生かせるような加工を行えるそうです。工場見学では、重さが約250tもある大型の機械を見せていただき、またモノづくりの現場で働く人たちの様子も見ることができ、良い経験になりました。

2週目の水曜日は、龍谷大学の協定校であるカリフォルニア大学デービス校（通称：UC Davis）を訪問しました。本大学には工学部、農学部などの学部があり、学生数は約35000人と大規模な大学で、海外から学びに来る学生も非常に多いようです。キャンパスの面積はカリフォルニア大学10校の中で最大であり、大学構内の移動方法は基本的に自転車のようなものでした。キャンパスを見た後は、工学部の方による講演を聞きました。工学部は7つの学科を有

しており、入学後にも自分の学びたい分野を選びなおし専攻を変更することが可能で、自由に学べるといふ柔軟で魅力的なシステムがあるそうで、とても羨ましく思いました。また、学生は講義のコマ数がそれほど多くない代わりに研究活動などに多くの時間を割いているようでした。講演後、The Center for Geotechnical Modelingという地質工学的なモデリングをする研究室がある施設を見学しました。実験室には半径9mもある巨大な遠心分離器があり、これで人工的に地震の様子を再現し、橋梁や堤防などの模型を用いてシミュレーションを行っていました。また、研究室には他大の学生が多く在籍しており、自らの研究に対して熱意をもって取り組む学生が多くいました。うちに閉じこもっているのではなく、もっと外に出ていかなければならない。自分も負けてはいられないと感じました。

5. おわりに

今回のプログラムへの参加が私の初めての海外経験でした。約2週間という短い期間でしたが、その間は英語を見る、読む、話す時間が普段に比べ圧倒的に長くなり、生活の一部になっていることが感じられました。英語での講義、企業や大学の訪問、そしてアメリカでのホームステイを通して、はじめての経験をいくつもして、苦手な英語で自分の考えをどうにか伝えようと必死になっているうちに、それまでより自分が積極的になり、少しだけ変わったように思います。この経験を大切にして、はじめてのことにも積極的にチャレンジして、変わるチャンスを手握りしていきたいと思っています。